

神奈川における西洋式築城との出会い

〜神奈川台場と小田原台場を中心に〜

藤沢西高校 武井 勝

一、はじめに

わが国の西洋式築城としては、教科書に写真が掲載されている函館五稜郭や長野県白田町の龍岡城が知られている。神奈川県内でも西洋式築城術を導入した「台場」が多く築城された。本報告では、主に「神奈川台場」「小田原台場」を中心に「台場」の歴史的性格等について、幕末期の海防政策との関連の中で考えていきたい。

二、西洋式築城の導入

我が国の築城に関する書物の中で、西洋の築城術について記載した最初のもは、一六五〇（慶安三）年に兵学者北条安房守氏長が著した『由利安牟攻城傳』である。これは、北条氏長がオランダ人ユリアン・スハーデルから築城法・攻城法等を伝聞し、三代將軍家光に奏上したものである。寛政・天保期には、清水徳川家の軍学者村尾正靖が『築城故實』の中で西洋の稜堡式築城を加味した砦を考案しているが、あくまでも机上の学問であった。幕末期になると、大砲の発達・普及に伴い、従来の築城術を大砲本位に改変するための西洋式築城が研究され、次のような翻訳書が相次いで刊行された。一八五九（安政六）年に廣瀬元恭がベクマン著『築城新法』を、伊藤慎がケルキウエイキ著『築城全書』を翻訳し、一八六〇（万延元）年には、吉母波石児著『築城典刑』が大鳥圭介により紹介されてい

る。他に『築城約説』、『斯氏築城典刑』などがある。

幕末期の築城には、大別すると台場（砲台）、堡塔、稜堡の三種類がある。台場は敵に面する方向に石垣或いは土塁を築き、数カ所に砲座を設けた露天の施設であり、建築物としては、残存する絵図面から柵、番所、硝煙蔵、人足小屋等が確認できる（図一）。堡塔は石壁に数個の砲眼を明け、その穴から砲撃する円筒形の石造建築物であり、特に大阪湾を中心に築城された。函館五稜郭、龍岡城に代表される稜堡は、縄張りが星形で、その突角部に砲座を置いて各稜堡から発射する十字火により敵を殲滅するという機能をもつ。稜堡式築城法は、一六世紀のイタリアで攻城砲に対抗すべく生まれ、オランダ・フランス・ドイツでも採用され、それぞれ独自に発展した。そして一七世紀後半に、フランスのポーバンが各国の築城術を統合し理論化したものである。台場のなかには、品川台場や神奈川台場のように稜堡の形式を取り入れたものが多くある。

三、神奈川県内の台場

幕末期には、駿河湾や上総・下総等の沿岸を除き全国の海岸線に約一〇〇〇箇所の台場が築かれている。神奈川県内でも、幕府の江戸湾岸防備体制の一環として三浦半島を中心に築城された（表一・図二）。それら台場の大半は、地元の小田原藩を除き江戸湾の防備を担った会津藩・川越藩・鳥取藩・彦根藩・松山藩などが築城し、防備体制の変更に伴い奉行所や諸藩に引き継がれている。また、各台場の備砲も引き継がれた各藩の所持する砲に変更され、その数は三門から一五門（≡猿島台場）で五・六門のものが多く、砲の配置は、横一線が一般的だが、地形の制約により山腹に上下二段（≡千

駄崎台場)、山上、中腹、山脚の三段(一)猿島台場)、半円状(二)千代ヶ崎台場)に配置したものもある。中でも神奈川台場と小田原台場は、規模、形状、歴史的役割等から特筆すべき台場である。

(1) 神奈川台場

横浜市神奈川区狛師町、現在のJ.R貨物線東高島駅に位置する。台場の形状等は、残存する絵図面や史料から知ることができる。三つの稜堡を持つ半星形の縄張りで、陸地とは渡り道2本で連絡し、その間を船溜まりとするという全国的にも稀少な形式の稜堡式台場である(図3)。規模は、海中へ西側百二間、東側百四十一間、横長百三十一間四尺(二三・七m)、奥行中央四十八間(八六・四m)、周囲三百七十四間四尺、石垣の高さ二丈六尺(八・五m)に復元できる(図4)。大砲は一四門が配置され、そのうち十門が三六ポンド砲であった。正確な形状や規模の解明には発掘調査及び範囲確認調査等が必要であることは言うまでもない。

この神奈川台場は、松山藩が六万両余の巨費を費やして独力で築城したもので、設計は勝海舟、縄張りは佐藤政養(与之介)、佐藤恒蔵が担当した。工事は一八五九(安政四)年六月から一年余りの突貫工事で行われ、一八六〇(万延元)年に完成した。松山藩は一五万石の家門で、一八五七(安政四)年に藩主松平勝成が「武州神奈川辺御警衛」を命ぜられ、神奈川宿内の並木町及び狛師町二ヶ所に台場の築城を決定している。一八五八(安政五)年には、新たに芝生村(現、横浜市西区)から川崎宿までの海岸警備を命ぜられ、藩費で狛師町に台場を築くことを幕府に願ひ出て許可を得ている。築城の目的は、砲の照準方向が波止場を向き、その距離が二・四kmであることから、外国人居留地の攻撃を意図した横浜開港に伴う警

備強化のためと考えられている。しかし、実際には外敵に対し砲撃したことは一度もなく、幾度か礼砲が発せられているに過ぎない。台場を実見した外国人からは、その軍事的効果が疑問視されている。

明治以後は、新政府の陸軍省が引き継いだ。一八九九(明治三二)年に砲台の資格を失い、一九〇七(明治四〇)年には大蔵省に引き継がれ後に鉄道省の所管となった。一九二四(大正一三)年十月に台場敷地に東高島駅が開業し、周辺の埋め立ても進められた。

現在の台場跡は、J.R貨物線東高島駅周辺に埋め残された石垣の一部が残存するのみである。一九九六(平成七)年に、横浜市神奈川区の委託を受けた土木学会が現況土木遺構調査を実施し、石垣埋設部の探査等により台場の位置が推定された(図5)。その結果をふまえて、系統的な調査の必要性や保存と活用のあり方などが提言されたが、その後も行政や研究機関による本格的な発掘調査は行われていない。

(2) 小田原台場

小田原城下「文久図」に小田原海岸に沿って三基の台場が描かれている(図6)。東側から「荒久御台場」(Ⅱ)「上の御台場」(Ⅲ)「東台場」(Ⅳ)現、浜町三一・一六、「代官町御台場」(Ⅰ)「中の御台場」(Ⅱ)「中台場」(Ⅲ)現、本町四一・八、(Ⅳ)「下の台場」(Ⅰ)「下の台場」(Ⅱ)「西台場」(Ⅲ)現、南町三一・一三)である。いずれも半円形の土塁を築き、側面に石垣、周囲に水堀を配し、二五個の三角形の突出部を持つ稜堡式台場である。規模については、史料に「縦 四十間、横 六十間、高さ 海面より 六間余 但、大砲備有之候処二而。(中略)一、台場三ヶ所之隔六七丁程允(下略)」(『大久保氏高帳・領内諸書留』神奈川県史・資料編5)とある。

資料が乏しいため築城に関する詳細は不明であるが、一八四九（嘉永二）年か五〇（嘉永三）年に着工し、一八五二（嘉永五）年には完成したとされている。築城には、江川英竜の葦山塾で高島流を習得した小田原藩士別府信次郎があたり、江川英竜が指導したものと考えられている。このことについて、梶 輝行氏は、江川英竜が品川台場に先行する最初の洋式台場として小田原台場の築城に着手し、設計にあたってはエンゲルベルトの『陸用砲術全書』、カルテンの『船舶新編』を参考にしたのであろうと論じている。

小田原藩は上記三台場の他にも、大磯照ヶ崎、真鶴村に台場を築城している。台場築城の背景には、江戸近辺の有力譜代藩としての小田原藩の海防政策との関わりが考えられる。小田原藩は一八二〇（文政三）年に浦賀応援を命ぜられて以来、浦賀等への出兵・守備や下田援兵を行うなど相州・豆州の海防主導藩であった。加えて自領の大磯から湯河原に至る海岸線の守備強化も必要であった。一八四八（嘉永元）年五月七日に藩主大久保忠愨は小田原海岸で江川英竜の家来による訓練を上覧し、七月二十八日には、直書を藩内に触れ、高島流砲術を組み込んだ台場の築城、田村矢筒の新造、砲術稽古の奨励などを柱とする軍制の強化を図っている。そして、一八四九（嘉永二）年の英国軍艦マリナー号の下田渡来をうけて、台場築城に着手したものと理解できる。

このように歴史的価値が高い小田原台場も、一九〇五（明治三八）年の防波堤工事により完全に消滅したらしい。小田原市の指定文化財であったようであるが、未調査であり関連資料も少ない。

四、台場築城と幕府の海防政策

県内の台場築城の背景にある幕府の海防政策について、江戸湾の防備体制を中心に寛政期、文化・文政期、天保期、弘化・嘉永期、ペリー来航後の五期に分けてその変遷を追うことにする（表2）。

寛政期は、老中松平定信が諸藩に対し永久的な海防を命じている。定信自身は伊豆・相模・安房・上総の海岸を巡見し、台場築城を主体とする防備計画を立てるが、老中退任とともに中止となった。

文化・文政期には、相次ぐロシア船の北辺襲来やフェートン号事件を機に江戸湾の防備に着手した。具体的には、白河藩に安房・上総側、会津藩に相模側の江戸湾防備を命じ、会津藩は安房崎、平根山、観音崎に台場を築き兵を駐屯させている。また一八二五（文政八）年には「異国船打払令」を発令している。

天保期は、老中水野忠邦を中心に、「打払令」の撤回、江戸湾防備体制の改革、全国的な海防強化、西洋砲術の奨励からなる海防政策の転換が図られた時期であるが、水野の退任により縮小された。

弘化・嘉永期には、海防掛が設置され、ピッドルの来航を機に、新たに彦根藩を相州警備に任じた。猿島、千駄崎、亀ヶ崎、鳶の巣、鳥ヶ崎に台場が築かれ、相州側の江戸湾防備の改善を進めるが、他方で、阿部政権は穩便主義を基調とする政策も展開している。

ペリー来航後は、品川台場築造に代表される江戸湾内の防備強化と併せ、大船製造禁止令の解除及び西洋砲術修業令の発令など外圧に抵抗する軍備充実策を実施した。また開港に伴い、蝦夷地、神奈川、長崎、箱館の警備強化にも力を入れ、その一環として神奈川台場も築城されたのである。

五 台場の歴史的性格

台場の歴史的性格について、二、三考えたことをまとめておく。まず、台場とは大砲を主眼とした西洋式築城を具現化したものであり、特に神奈川台場は全国的にも稀少な形式と規模を誇る稜堡式台場である。小田原台場も江川英竜が設計した品川台場に先行する洋式台場として歴史的価値は高く、幕末の海防史を解明する上でも貴重な資料である。また、城郭史においては、台場は元寇防塁以来の対外的な城であり、国家的事業による築城である。例えば、江戸湾沿岸の台場は外国船の襲来に備えた防備線上に無駄なく分布しており、戦国大名の支城体制と変わることはない。しかし、砲撃を主とする砲台としての効果は疑問であり、県内の台場を見た限りでも、実際砲撃した事例は、モリソン号が浦賀に來航した際の平根山台場の例しか見られず、砲撃を主とする砲台としての効果は疑問である。そして、台場の性格をより一層明確にするためにも、系統的な考古学的調査は必要である。発掘調査によって、台場の形状や規模、石垣や内部の建築物の構造等を解明し、その成果を史料と対比させることで初めて台場の全体像が明らかになるのである。近年、近代考古学の進展に伴い、千葉県富津陣屋跡、山口県前田砲台跡、福井県松ヶ瀬台場跡など全国で台場の調査が活発に行われている。県内でも神奈川台場をはじめ多くの台場の調査を期待したい。

六、おわりに

以上、幕末期の神奈川県内には多くの台場が築城され、海防史の中で重要な役割を果たしてきたのである。教材化の視点からも、台場は幕末期の海防政策や開国直後の開港場の状況を学習する際の具

体的な実物資料として活用できる。また文化遺産の保存や文化財保護の重要性を考えさせる際にも有効な資料となりうるものである。しかし、県内の台場の大半は、十分な調査もなされず開発の波にのまれ姿を消しつつある。一刻も早い保存・整備・活用が望まれる。

〈主な参考文献〉

- 赤星直忠 一九五五「三浦半島城郭史」上『横須賀市史八』
石井龍彦 二〇〇〇「最近の発掘から 幕末の前田砲台跡」
大類 伸・鳥羽正雄 一九三六『日本城郭史』 雄山閣
小笠原 清他 一九八〇『日本城郭大系』第六卷Ⅱ千葉・神奈川
小笠原 清他 一九九五『小田原市史』別編 城郭 小田原市
新人物往来社
梶 輝行 一九九五「幕末期小田原藩と海防政策」
浄法寺朝美 一九七一『日本築城史』 原書房
土木学会 一九三六『明治以前日本土木史』 岩波書店
土木学会 一九九六『神奈川台場土木遺構調査報告書』
西ヶ谷恭弘 一九七二『神奈川の城』上 朝日ソノラマ
西ヶ谷恭弘 一九七三『神奈川の城』下 朝日ソノラマ
西ヶ谷恭弘 一九八八『日本史小百科』「城郭」 東京堂出版
西川武臣他 一九九八『神奈川台場関係資料集』 編集委員会
原 剛 一九八八『幕末海防史の研究』 名著出版
増田恒男 一九九六『神奈川台場考』

神奈川台場を守る会会報『かながわ台場』第二

	台場名称	所在地	築造年代	備考(築城主体等)
1	鶴ヶ崎	横須賀市長瀬	1809(文化6)年	会津藩
2	平根山	横須賀市西浦賀	1811(文化8)年	会津藩
3	安房崎	三浦市城ヶ島	1808(文化5)年	浦賀奉行、1811年修築
4	観音崎	横須賀市鴨居	1812(文化9)年	会津藩
5	十石崎	横須賀市走水	1843(天保14)年	川越藩
6	旗山	横須賀市走水	1843(天保14)年	川越藩
7	真鶴	真鶴町真鶴	1845(弘化2)年以前	小田原藩
8	八王子山	鎌倉市腰越	1846(弘化3)年か	川越藩
9	猿島	横須賀市猿島	1847(弘化4)年	川越藩
10	千駄崎	横須賀市久里浜	1847(弘化4)年	幕府
11	亀甲岸	横須賀市西浦賀	弘化年間	嘉永6年増築
12	箒山	横須賀市長沢	弘化年間か	
13	代ヶ崎	横須賀市西浦町	1848(嘉永元)年	浦賀奉行
14	亀ヶ崎	横須賀市鴨居	1852(嘉永5)年	鴨居村民請負
15	鳶の巣	横須賀市鴨居	1852(嘉永5)年	川越藩、旧観音崎台
16	鳥ヶ崎	横須賀市鴨居	1852(嘉永5)年	西浦賀吉郎兵衛・平吉
17	小田原	小田原市南町	1852(嘉永5)年	小田原藩・江川英竜
18	見魚崎	横須賀市西浦賀	1853(嘉永6)年	
19	明神崎	横須賀市東浦賀町	1853(嘉永6)年	
20	本牧八王子	横浜市中区本牧	1853(嘉永6)年	鳥取藩
21	荒崎	横須賀市長井町	嘉永三年頃か	彦根藩
22	大浦山	三浦市南下浦町	嘉永年間か	
23	剣崎台場	三浦市南下浦町	嘉永年間か	
24	本牧護国山	横浜市中区本牧	1857(安政4)年	鳥取藩
25	神奈川	横浜市神奈川区漁師町	1860(万延元)年	松山藩
26	館浦	横須賀市西浦賀	1861(文久元)年	

表1 神奈川県内の台場一覧(小笠原他1980)(西ヶ谷1972・73)(赤星1955)を参照に作成

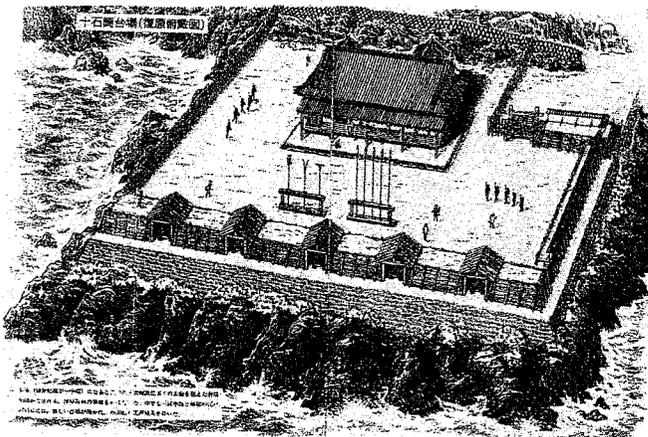


図1 十石崎台場(復原俯瞰図)
(西ヶ谷 1992より転載)

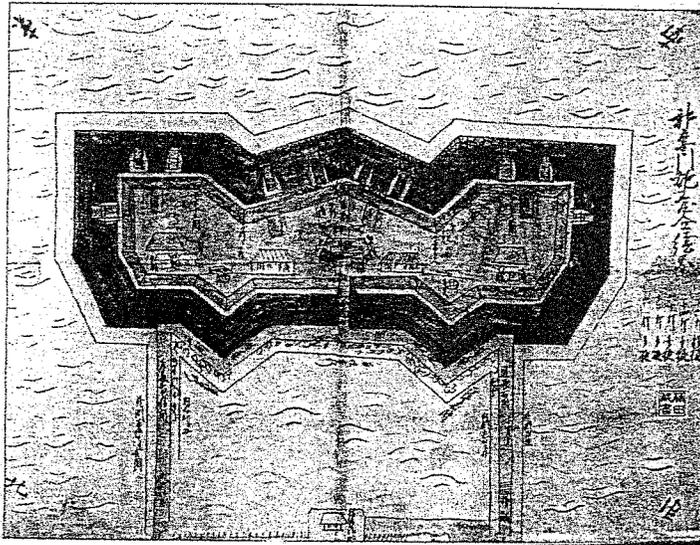


図3 神奈川砲台図 (藤田武明氏蔵)
(西川他 1998より転載)

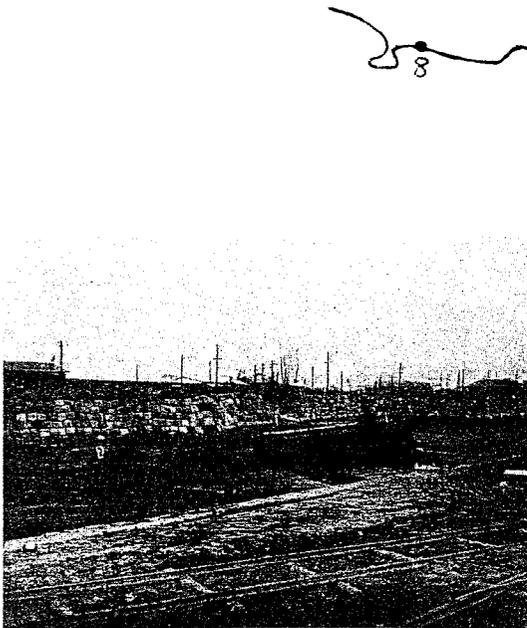


写真1 昭和10年代の神奈川台場
(増田 1996より転載)

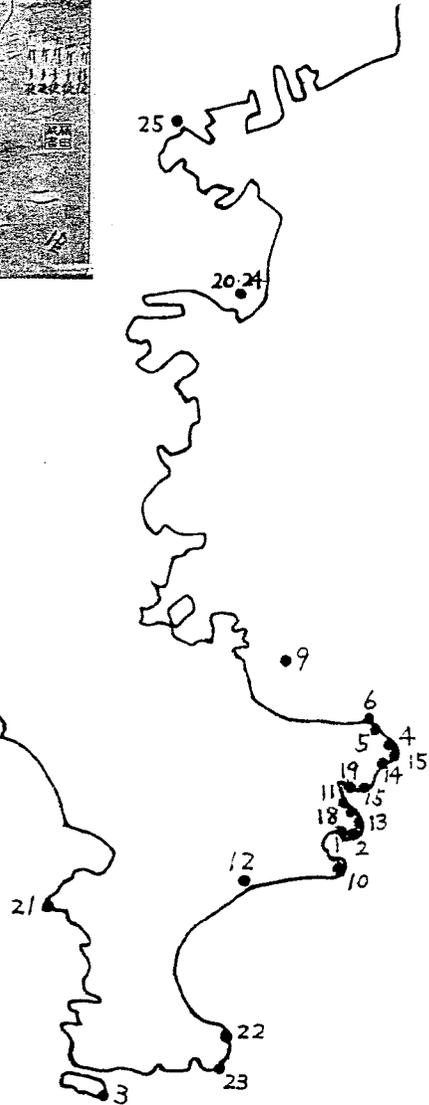
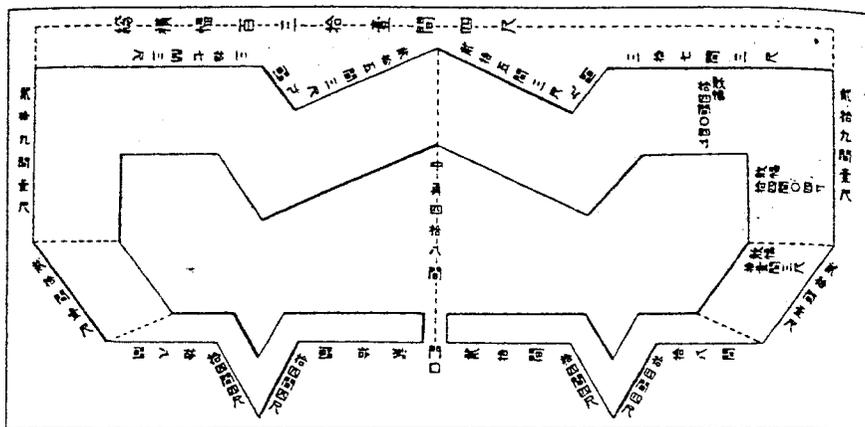


図2 県内台場分布図



神奈川砲台土手圖

図4 神奈川砲台土手圖 (土木学会 1936より転載)

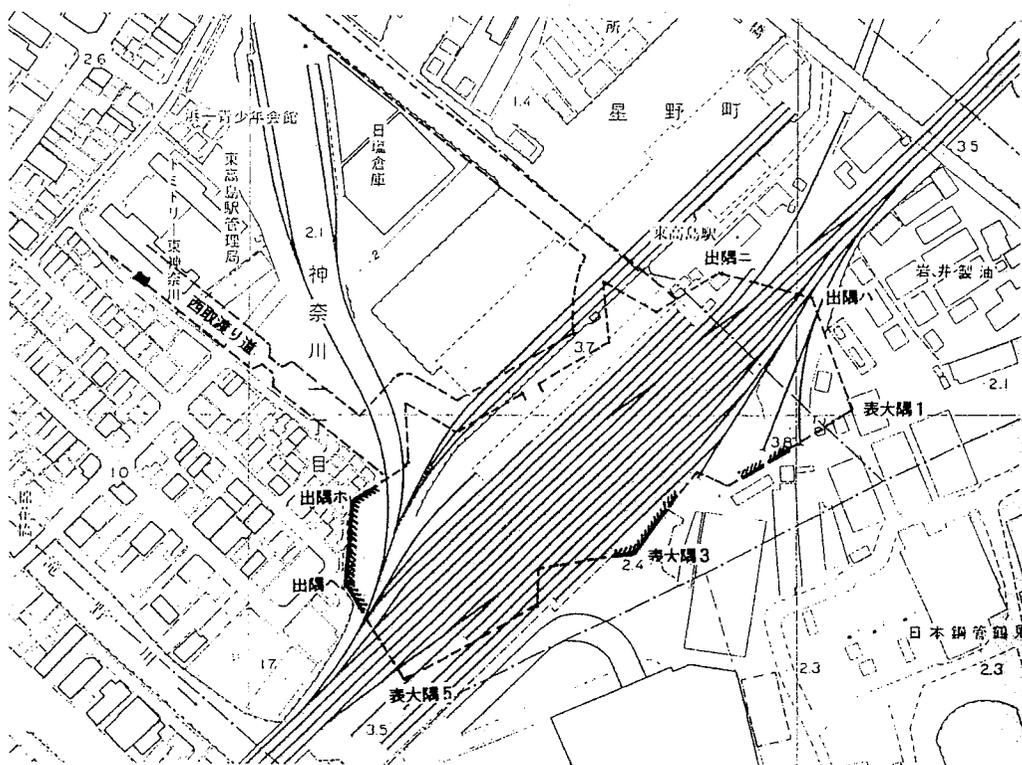


図5 神奈川台場推定位置図 ((社) 土木学会 1996より転載)



図6 小田原城下「文久図」写真
(小笠原他 1995より転載)

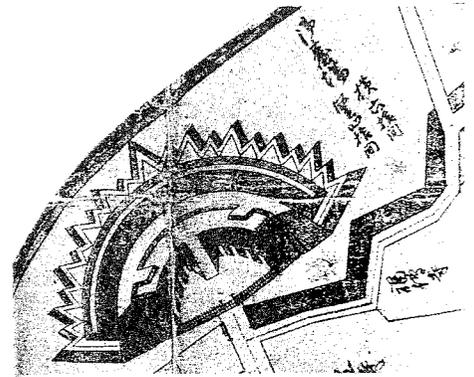


図7 「文久図」代官町台場写真
(小笠原他 1995より転載)

1792 (寛政4)年	ロシア使節ラクスマン根室に来航し、通商を求める。
1793 (寛政5)年	松平定信、伊豆・相模・安房・上総を巡見する。
1804 (文化元)年	ロシア使節レザノフ長崎に来航、貿易を要求する。
1808 (文化5)年	イギリス船フェートン号長崎に来航し、通商を要求する。
1810 (文化7)年	白河藩に安房・上総側、会津藩に相模側の江戸湾防備を命じる。
1811 (文化8)年	会津藩は安房崎、平根山、観音崎に台場を築き、兵を駐屯させる。
1820 (文政3)年	会津藩の相州警備を免じ、浦賀奉行の所管とする。
1825 (文政8)年	「異国船打払令」を発令。
1837 (天保8)年	アメリカ船モリソン号浦賀に来航し、浦賀・山川で撃退する。
1839 (天保10)年	鳥居耀蔵、江川英竜、豆相房総を見分し、江戸湾防備改革案を提出する。
1842 (天保13)年	幕府、高島秋帆による西欧式砲術教授を公認する。天保の薪水給与令発令
1844 (弘化元)年	オランダ国王ウィレム2世の開国勸告を幕府は拒否する。
1846 (弘化3)年	ビッドル、浦賀に来航し通商を要求するが、幕府は拒否する。
1847 (弘化4)年	新たに彦根藩を相州警備に任じ、猿島、千駄崎に台場を築造する。
1852 (嘉永5)年	亀ヶ崎・鷹の巣・鳥ヶ崎に新規台場を築くなど相州側の防備が充実
1853 (嘉永6)年	ペリー浦賀に上陸。ペリー来航直後、品川沖に台場築造を決定。本牧警衛を鳥取藩、江戸湾入口の相州側警衛を熊本・萩藩に命じ、江戸湾防備を強化
1854 (安政元)年	日米和親条約締結。
1858 (安政5)年	日米修好通商条約締結。福井藩に横浜警衛を命じ、松山藩の神奈川警衛を常備警衛とする。

表2 台場築城と海防政策関連年表